

2007年度ゼミの取り組みについての実践報告

杉野本 真実・豊永 真智・益田 文香・(監修) 荻野 源吾

Social Work Technical Seminar I (Instructor: Gengo Ogino) Seminar Report
About *The Casework Relationship* and Other works

Mami Suginomoto, Machi Toyonaga, Ayaka Masuda and
(Editorial Supervisor) Gengo Ogino

Key Words: 演習 (Seminar), 個別化 (Individualization), ケースワーク関係 (Casework Relationship), アーミシュ (Amish), 穏やかな人々 (The Gentle People), 意図的な感情表現 (Purposeful Expression)

Abstract: This report is a report about the seminar. I will report on two themes in particular. The first is a report about *The Principles of Casework*. The other is a report about *The Gentle People*. And I want to convey the main content discussed in the seminar.

はじめに

人間福祉専門演習Ⅰ（荻野ゼミ）ということで福祉の援助技術の取得を主な目的として取り組む。そこで指導教員から「各自のテーマでの

研究でも良いし、全体での取り組みでも良い」との提示があったが、私達は全体での取り組みを選んだ。以下、今年度のゼミの取り組みについての経過を報告し記録に残しておきたいと思う。

表1 前期の取り組み

授業回数	演習テーマ	概要
1	オリエンテーション	・ゼミで何に取り組むか、方針 ・各自のプロフィール紹介
2	まずウォーミングアップを!	・「幸せ論」(人間福祉研究2007)を素材として ^(注1) ・レポート提出(「幸せ論」に関する意見, 感想)
3	「幸せ論」と「林住期」について	・「幸せ論」と「林住期」 ^(注2) を通して討論, 人間の終末を考える
4	①本の紹介と意見交換	・各自が興味を持った本2冊紹介 ^(注3) ・どんな本か説明
5	②本の紹介と意見交換	・各自の本の紹介と質疑
6	③本の紹介と意見交換	・より具体的な説明
7	ケースワークの位置づけ	・資料に基づく理論の枠組みの説明の学習
8	ケースワークの展開	・診断主義と機能主義などに関して
9	「ケースワークの原則」 <small>(注4)</small>	・第1部「ケースワークにおける援助関係の本質」(P.3~P.13)

10	「ケースワークの原則」	・第1部「ケースワークにおける援助関係の本質」(P.13~P.22)
11	「ケースワークの原則」	・第1部「ケースワークにおける援助関係の本質」(P.23~P.26) ・エネルギー工学(「幸せ論」との関連) ・福祉科教育—ケースワークを理解した教師像とは?『 胆大心細 』について
12	「ケースワークの原則」	・第1部「ケースワークにおける援助関係の本質」(P.27~P.30)
13	「ケースワークの原則」	・本を用いてケースワークの歴史についてのレポート提出 ^(注5)
14	「ケースワークの原則」	・原則1「クライアントを個人として捉える」(P.41~P.50)に関して
15	「ケースワークの原則」	・提出レポートからケースワークの歴史解説

□ 前期の流れのまとめ

前期は、まず「幸福論」や先生が提示した福祉資料などから「人間の一生や終末について」またケースワークの位置付けや展開について学んだ。そして、各自で興味がある福祉分野の本

を選び発表しあったりし、最終的にはF.P.バティストの「ケースワークの原則」をゼミで取り組んでいくことに決まった。「ケースワークの原則」からは前期は主にケースワークの歴史について学ぶことが出来た。

表2 後期の取り組み

授業回数	演習テーマ	概要
1	「ケースワークの原則」	・原則1 (P.42~P.45)
2	「ケースワークの原則」	・原則1 (P.45~P.50)
3	「ケースワークの原則」	・原則2「クライアントの感情表現を大切にする」(P.51~P.54)
4	「ケースワークの原則」	・原則2 (P.55~P.59)
5	「ケースワークの原則」	・原則2 (P.60~P.74)
6	「ケースワークの原則」	・原則3「援助者は自分の感情を自覚して吟味する」
7	「穏やかな人々」	・「穏やかな人々」のレポート提出
8	「穏やかな人々」	・「穏やかな人々」のレポートにもとづく討論
9	「穏やかな人々」	・「穏やかな人々」の“馬車と車”のレポート提出
10	「ケースワークの原則」と「穏やかな人々」	・原則3 ・馬車と車のレポートから話し合い
11	「ケースワークの原則」	・原則4「受けとめる」(受容) — “ 味のある人になるう ”を学ぶ
12	「人間福祉研究のまとめ」	・原稿の整理
13	「ケースワークの原則」	・原則5「クライアントを一方向的に非難しない」
14	「ケースワークの原則」	・原則6「クライアントの自己決定を促して尊重する」 ・原則7「秘密を保持して信頼感を醸成する」
15	まとめ	
フィールドワーク	自然と親しむ	・広島市森林公園にて(写真)



(写真 上段左から杉野本・豊永・益田
下段 荻野先生)

□ 後期の流れのまとめ

「ケースワークの原則」からは、ケースワーカーとしてクライアントとどのように接したら良いかなどを、理論や具体的な事例を通して学んだ。自分たちで質問や討論をしながら読んでいったのでより理解することが出来た。またもう一つのテーマとしての「穏やかな人々」からは、アーミシュの人々の馬車を使い自動車や電化製品を一切使わない暮らしを学び、現代社会に生きる私たちの暮らしを比較することで現代社会の問題点や良い点を学ぶことが出来た。

以下の節でこの二つの内容について詳しくふれたい。

注1 「人間福祉研究」(2007) 広島文教女子大学人間福祉学会, 第5号

注2 「林住期」(2007) 五木寛之, 幻冬社

注3 前期の4～6回目の本の紹介と意見交換で各自が選んだ本は以下の本である。

(杉野本) 「障害者と差別言語—健全者への問いかけ」(1986) 生瀧克己, 明石書房

「雨上がりの空に—障害の重い人々の暮らし」(1998) 小野隆二・青い鳥福祉会職員団, 群青社

(豊永) 「ノーマライゼーションの町づくり」(1993) 山本和儀, 医歯薬出版

「クオリティ・オブ・ライフ—豊かさの本質とは」(2006) アーサー・ヌスバウム・アマルティアセン, 里文

(益田) 「障害者に迷惑な社会」(1994) 松兼功, 晶文社

「偏見の断層—福祉を支える友へ」(1987) 忍博次, 筒井書房

注4 「ケースワークの原則—援助関係を形成する技法 [新訳改訂版]」(2006) F.P. バイステック著, 尾崎新・福田俊子・原田和幸訳, 誠信書房

注5 前期の13回目の「ケースワークの歴史」のレポートのために各自が調べた本は次の通り。

(杉野本) 「ソーシャル・ケースワーク論 社会福祉実践の基礎」(1999) 大塚達雄, ミネルヴァ書房

「ケースワークと介護」(2001) 丹野真紀子, 一橋出版

「第3巻 社会福祉の方法—ケースワーク論」(2003) 仲村優一, 旬報社

(豊永) 「ケースワーク論」(1975) 小松源助, 有斐閣

「ケースワークの基礎知識」(1977) 小松源助・山崎美貴子, 有斐閣

「ケースワーク研究」(1973) 岡本民夫, ミネルヴァ書房

(益田) 「戦後社会福祉基本文献集28 ケースワーク研究」(2001) 岡本民夫, ミネルヴァ書房

「新版・社会福祉学習双書2007<第8巻>社会福祉援助技術総論」(2007)

松尾武昌, 社会福祉法人 全国社会福祉協議会

「社会福祉の歴史 政策と運動の展開」(1977) 右田紀久恵・高澤武司・古川考順, 有斐閣

(豊永真智)

I Individualization (個別化の原則) の日本語訳の変化についての検討

私たちは研究課題としてソーシャル・ケースワーク論を取り上げ、バイステックの7原則を輪読した。旧訳^(注6)、新訳^(注7)とその改訂版^(注8)にふれ、そこで訳し方に違いがあることに気付いた。ここでは特に、第一原則について言及することとする。

「個別化」とは、バイステックの7原則で第一番目に取り上げられている旧訳の原則である。

援助者はクライアントを、問題や状態像で安易にタイプ分けをするのではなく、個人として捉えることの意義を示している原則である。つまりクライアントの独自性を援助者が理解しようとすることであり、さらにその人の能力や特性に関係なく、尊厳のある個人として接することも含んでいる。

旧訳では原則の名称を「個別化」として訳してあるのに対して、新訳では「クライアントを個人として捉える」と訳してある。なぜ「個別化」を「個人として捉える」という言い方へ変わったのか、このことを明らかにするため、厳密に原著にあたってみた。

Individualization is the recognition and understanding of each client's unique qualities and the differential use of principles and methods in assisting each toward a better adjustment. Individualization is based upon the right of human beings to be individuals and to be treated not just as a human beings but as this human beings with his personal differences. (注9)

上記のように、新訳での「個人として捉える」という原著の語句は、“Individualization”であることには変わりはない。

ところで、原著の7つの原則における「援助関係における相互作用」(表3参照)を見ると「第一の方向であるクライアントの欲求」は To be treated as an individual と書かれてある。その和訳は「個人として取り扱われること」となっている。旧訳ではそれを基に原則の名称を「個別化」としているのに対して、新訳ではその第一の方向をそのまま原則の名称に充て「個人として捉える」という訳になったと推測できる。

そこで、Individualization の概念としては『人間は一人ひとり名前も顔も違うように、それぞれが個性を持った存在である。生活環境も生活経験も異なる。したがって困難な問題に直面した時の対応の仕方・受け止め方は人それぞれで違う。生活に困窮している人を大雑把に貧困者として分類し扱うことは、その人を一人の人間、その人なりの独自の存在であることを無視する危険がある。どんな状況にあらうとも、人はその人なりの考え方や自尊心があるから、個人として尊重されるべきである。この原則は状況にあわせてクライアントを理解し接する重要性を示している。個別化の原語の初めの individual には「個々の」という意味と「個人」という意味がある。このことから分かるように「個別化」には一人の人間を個人として尊重するという

表3 援助関係における相互作用

第1の方向 クライアントの欲求	第2の方向 ケースワーカー の反応	第3の方向 クライアントの 覚知	原則の名称
1. 個人として取り扱われること 2. 感情を表出すること 3. 問題に対して共感的反応を求めること 4. 価値ある人間として取り扱われること 5. 審判されないこと 6. 自分自身で選択と決定をなすこと 7. 自己に関する秘密を守ること	ケースワーカーはこれらの欲求に対して敏感であり、理解し、適切に反応する	クライアントはケースワーカーの感受性、理解および反応をなんとなしに覚知する	1. 個別化 2. 意図的な感情の表出 3. 統御された情緒関与 4. 受容 5. 非審判的態度 6. クライアントの自己決定 7. 秘密保持

(注11)



ニュアンスが強く込められている。』^(注10)との説明が最も適切と言えるのではなからうか。

以上見てきたようにバイステックは、もともとクライアントが個人として取り扱われたいという基本的要求を援助者が満たそうとすることを含めて、ケースワーク（個別援助技術）の原則を「個別化の原則」と呼んだ。旧訳から新訳に改訂されるまでに31年、新訳がさらに改訂版になるまでに10年、あわせて41年の間に Individualization をめぐっての変化があったことは興味深いことである。Individualization の訳として、新訳では「クライアントを個人として捉える」と訳してある。一見わかりやすいように改訂されているが、「個別化」に含まれている意味は深く、そのまま残しておきたいと考える。改訂版では「クライアントを個人として捉える（個別化）」とし、旧訳である「個別化」が復活されている。この点からも旧訳の意味の深さを改めて強調したい。

注6 「ケースワークの原則」(1965) F.P. バイステック著、田代不二男・村越芳男訳、誠信書房

注7 「ケースワークの原則—援助関係を形成する技法 [新訳版]」(1996) F.P. バイステック著、尾崎新・福田俊子・原田和幸訳、誠信書房

注8 「ケースワークの原則—援助関係を形成する技法 [新訳改訂版]」(2006) F.P. バイステック著、尾崎新・福田俊子・原田和幸訳、誠信書房

注9 “THE CASEWORK RELATIONSHIP” (1957) F.P. BIESTEK, S.J. Loyola University Press, P. 25

注10, 11 「ソーシャル・ケースワーク論—社会福祉

実践の基礎—」(1994) 編著者 大塚達雄・井垣章二・沢田健次郎・山辺朗子、ミネルヴァ書房、P. 31、傍線は筆者

(杉野本真実)

II 『穏やかな人々』—アーミシュ生活の個人的回想—^(注12) を素材にして

以下、上記の文献をもとに現代社会との違いについて考えていきたい。この『穏やかな人々』は、萩野源吾先生の大分大学時代の友人で経済学部教授（共生論）の訳本である。現代のアメリカの社会の中で、特異な生活を守る人たちの事を紹介したもので人間福祉論や福祉の支援との関わりで、ぜひゼミ生に読んで欲しいと提供されたものだ。

まず、「アーミシュ」について説明してみたい。

「アーミシュ」という言葉は、馬車を乗り、教会家屋を持たない、ドイツ語を話す「素朴な人々 *plain people*」といわれる宗派のことをいっている。彼らは、暴力とテクノロジー技術を教えない。多くのアーミシュは、彼らの簡素で信心深い生活がかれらの周りの騒然とした社会によって脅かされていると感じた。彼らは広いアメリカの中で20州に分散して住み、「部外者の世界」の世俗の影響から離れようとする、孤立したコミュニティに住んでいる。勤労、慎重な勤め、額の汗、既婚男性のあごひげおよび、第一言語としてのドイツ語、すべては目的—永遠の命—への手段とされている。彼らは、農場に住んでいて、電気、自動車、トラック、トラクター、ラジオ、テレビ、その他の現代生活の「必需品」を使うことは無く、馬車で移動をするという大変素朴な生活をしている。子供たちには、8年以上の義務教育は認められなかった。彼らは、5歳の時に植物を植えたり、世話したりするために庭の一角が与えられ、飼育するために子豚と子牛を与えられる。彼らは、鍛冶屋か馬車製造といった農業関係の仕事に就いている。^(注13)

以上がアーミシュの特徴的な生活であるが、各自がこのテキストを読んでの一口コメントとしての感想は次のようなものであった。アーミシュの方々を強い人だと思った。周りの社会に左右されること無く、自らの生活に十分満足しているという印象を受けた。(杉野本) 家庭で見られる便宜品を欠いて生活していることに驚いた。現代人は、電化製品に頼りすぎていると感じた。(豊永) 自分たちの生活とあまりにもかげ離れていて理解しにくかった。現代人には、心のゆとりが必要だと思う。(益田) これがおおまかな印象である。

次に、具体的な“馬車と自動車のメリット・デメリット”(表4)と今日におけるモータリゼーションの功罪についてとりあげ考察した。

モータリゼーションの功罪について考えてみよう。

今日の私たちの生活は、自動車が普及し始めたことで急激に便利になった。今まで行けなかった所にも気軽に行けるようになり、移動時間も短縮された。移動だけでなく、道路の整備やガソリンスタンドの建設など、自動車の普及に合わせて街並みもどんどんと変化してきて、地域が活性化してきている。

しかしその一方で、自動車事故の多発や排気ガスによる環境問題など様々な問題が生じてきているのも事実である。自動車事故については、

年々増加してきて、時に命の危険性もある。

私たち現代人は、生活の楽を求めるばかりに機械に頼りすぎているように思う。もし、身の周りにある機械が無くなってしまったら、私たちは生活していくことが出来ないだろう。そういう依存を無くしていくには、おおいに自分の手や足を使うことを忘れてはいけないと思う。

この『穏やかな人々』を読んで、私たちは多くのことをアーミシュから学んだと思う。現代社会で生きる私たちとは全くかけ離れた生活をしている彼らに、最初は驚きを隠せず、なぜあえてこんな生活をしているのかと思っていた。今や時代はさらに進み、携帯電話やデジタルカメラ時代であるが、テレビや冷蔵庫、車といった物が無い生活は、私たちには考えられない。しかし、彼らにとっては、そんな生活とは無縁なのである。そして、彼らは今の現代人が忘れてしまった芯の強さ、穏やか、安らぎや純粹さといったものを持っている。それらは、周りの社会に流されずに生きてきた彼らだからこそ持っているものだと思う。

現代人とは違って、禁欲に生きる彼らに今以上の生活はない。そういう、禁欲や謙虚さを私たちも見習い、意識していくことで彼らの持つ芯の強さ、穏やか、安らぎ、純粹さといったものに少しは近づけて行けるのではないだろうか。

表4 馬車と自動車の比較

	馬 車	自 動 車
メリット	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆったりとした気分になれる ・のんびりとした時間が過ごせる ・景色を楽しめる ・自然にやさしい—環境にやさしい ・コストがかからない ・事故が少ない ・免許証がいらない 	<ul style="list-style-type: none"> ・快適に乗れる ・長距離(広範囲) 走れる ・天候に左右されない ・速度が速い—目的地に早く着く ・見込みが良い
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> ・速度が遅い ・脆い—壊れやすい ・馬のえさ代がかかる 	<ul style="list-style-type: none"> ・環境に悪い—排気ガスがでる ・コストがかかる ・事故が多い ・渋滞になる

便利になるように、楽になるようにといった欲ばかりを出さずに、現状を肯定的に捉えることが出来れば今の生活も苦ではないし、充実したものになっていく気がする。

注12 穏やかな人々—アーミシュ生活の個人的回想—
(1) (1991), ジョー・ウィットメア (Joe Wittmer)
アーミシュの子供と大人からの寄稿とともに・丸山 武志訳

注13 穏やかな人々—アーミシュ生活の個人的回想—
(1) (1991), ジョー・ウィットメア (Joe Wittmer)
アーミシュの子供と大人からの寄稿とともに・丸山 武志訳, P.148~P.158

おわりに

この一年間のゼミのプロセス全体を振り返ってみると、そこで取り扱われた「ケースワークの原則」や「穏やかな人々」などは一見別々の事柄のように見えるが、実はエコロジーとソーシャルワークの面からも深く関連していることが分かった。これらの学びを土台にソーシャルワーカーとしての援助技術の獲得において有効に活用していきたいと思う。

このゼミではかなり難しい内容にチャレンジしたが、わかりやすく解説がなされたので理解ができた。指導教員から励ましを受けた。

(益田文香)